

輪中地域北部における都市化と災害

棚 瀬 佳代子

日本でも有数の洪水常襲地域である濃尾輪中地帯の中の五六輪中地域では、高度経済成長以降急激な都市化が進行している。ところが、昭和51年9月12日の長良川決壊を契機に輪中堤の意義がクローズアップされるとともに、この地域の開発の欠点が浮き彫りにされた。

本研究では、五六輪中地域における近年の都市化の様子を土地利用からとらえ、過去において数多く水害を経験してきた住民が、どのような防災対策をもって生活しているのかを明らかにすることをその目的とした。

第I章では、西濃地方の自然環境と人文環境を述べた。

第II章では、輪中研究グループによる輪中と輪中地帯の定義を述べ、その定義から五六輪中が輪中といえるかどうかを6つのポイントを設けて調べた。その結果、五六輪中はこの定義に従って輪中といえることができた。また、輪中地帯の洪水・治水史、輪中形成の歴史、人々の独特な生活様式などについて述べた。輪中地域の文化の中では、家屋や農耕具に特徴があるということがわかった。

第III章では、まず、五六輪中堤内地の土地利用の変化を述べた。都市的土地利用や工業的土地利用が著しく増えたのに対し、農業的土地利用は減少し、しかも粗放化が進んでいる。ところが、都市的・工業的土地利用のほとんどが中川と五六川沿いの低湿地に見られ、水に対しては極めて危険である。従って9.12災害（昭和51年9月12日の長良川決壊による災害）の時には、これらの地域は五六輪中の中で被害が最も大きく、このことを十分に証明した。一般に、五六輪中地域では自然堤防などの高いところは古くから集落が立地していたので、近年の大規模な住宅地化や工場地化は、輪中中央部の最も低湿な地域にしか余地がなかった。そのために非常に危険な開発をせざるを得なかったのである。自治体としては、排水施設を強化したり水防団を充実させるなどの対策を立てたり、土盛りなどを積極的に指導している。一方、このような低湿地に住む新住民は、1m以上も土盛りして家を建て、避難用具（ボートなど）を備えるという努力をしている。しかし、堤外地に目をやると、そこは昔ながらの農業的景観が卓越し、非常にのどかである。中でも、一部では農作物の粗放化が非常に進み、柳や桑が樹海のように茂っている様子もみられた。従って、今後は、堤内地よりも概して土地の高さが高い堤外地の開発を考慮すべきであると思う。

この研究の調査を通して、私たちの先人が、この地域の自然的諸条件に絶えず働きかけることによって、この地域を自分たちの生活の場としてきた努力を少しは知ることができたことは、私にとっては幸いであった。